

第3章 活躍期 記念館の専用コート完成し活発な活動年表

1959年（昭和34年） 4月13日慶応義塾創立100年を記念した日吉記念館の落成式挙行。

1960年（昭和35年） 全日本大学選手権男子団体で8年ぶりの優勝。

1961年（昭和36年） 全日本大学選手権男子団体準優勝。

関東学生男子シングルスで宮永優勝。

日吉記念館のコートが向きを90度変更し、3面から4面になる。

1962年（昭和37年） 全日本大学選手権男子シングルス宮永優勝。

全日本総合選手権男子シングルス宮永優勝。

東日本大学選手権男子シングルス宮永優勝。

部主催ダンスパーテイはこの年をもって中止。

1963年（昭和38年） 入学が難しくなり、有望な高校生の入学が途絶える。

関東大学女子秋期リーグ戦3部優勝。入れ替え戦に敗れ2部昇格ならず。

1964年（昭和39年） 全日本大学選手権男子団体準優勝。

慶応定期戦初の敗戦。

日本代表チームはトマス杯インターゾーン出場をかけたアメリカ地区予選に参加、北米を中心に転戦し優勝。インターゾーン出場を果たす。塾からは宮永武司（1963年卒）出場。

トマス杯インターゾーン日本大会開催。日本は第3位。宮永出場。関東大学女子春期リーグ戦部員不足のため欠場。4部へ降格。

概説

塾創立100周年事業で日吉に記念館が完成し、待望の専用コートができ、天現寺幼稚舎、神奈川体育館などと渡り歩いた練習場に不自由することがなくなり、記念館の休館日を除いて毎日思いっきり練習することができるようになった。

第10回全日本大学選手権で8年ぶりに男子団体優勝を飾ったのは昭和35年のこと。中村（故人）、山田ら油の乗り切った3年生に2年生の宮永などを加えたメンバーが中心となって活躍した。インカレ団体優勝は、これを最後に現在まで残念ながらもまだ無い。記念館のコートは完成以来それまで、正面の入口から入ると横向きに3面並んでおり、シャトルを打つ方向が窓に向かっていて、たいへん見にくかった。昭和36年に関係者各位の努力の甲斐あって、ようやく現在の向きに改修され、コート数も1面増えて4面となり、練習環境は充実した。

当時、部の貴重な資金源となっていたダンスパーテナーは、昭和36年を最後に体育会本部の指導により、行うことができなくなった。

これに代わる資金調達としては、3年生以下の部員によって11月の納会後にアルバイトが行われ、収入の半分を部に納入することとなった。

入学難はさらに進み、とうとうインターハイ出場選手の入学がこの年以降しばらく途絶えた。この影響は、昭和40年以降の戦績に表れ、関東大学リーグで2部に転落することとなる。昭和39年を最後として、わが国のバドミントン界の草分けとして頑張ってきた、慶応義塾体育会バドミントン部の輝かしい戦歴はひと区切りとなってしまった。

この年の春のリーグ戦は、前年秋に続き2位を確保したが、楽勝が予想された慶早定期戦において、よもやの敗戦を喫した。早稲田に対しては、前年まで11連勝無敗と絶対の優位を保ち、この年の春期リーグ戦においても8―1と寄せつけず、圧倒的強さを発揮していた。しかし、新人の補強にかを入れてきた早稲田は、5複10単の慶早戦では中下位でポイントを重ね、上位で塾は順当に勝ったものの7―8のフンポイント差で敗れた。

翌年にはリーグ戦も2部への道をたどるのであった。トマス杯インターゾーン東京大会は昭和39年に行われた。塾からはOBの宮永（昭和38年卒）が出場した。

この大会を契機として、シャトルは陸鳥球（鶏球）から水鳥球に代わっていった。ラケットも全金属製のもの、試作品ながら登場してきた。当時のラケットは、初期のオールウッド製から進歩して、シャトルの部分のみステンール製になっていた。

東京オリンピックが開催されたのもこの年で、わが国は高度成長への道を歩み始めた時代であった。

〔1〕杉、大嶋 記

日吉記念館落成

野島 義 (昭和35年卒)

慶応義塾創立100年記念に際して体育施設を日吉に体育館と50m及び飛込プールなどを計画した。この体育施設建設について昭和36年度慶応義塾体育会役員、三田体育会員名簿冒頭に石丸重治先生が下記の如く記している。

「従来慶応義塾創立100年記念建設資金の募集は義塾1本で集め、その他の指定寄付は行なわない方針であったが体育会先輩の熱心な要望、又創立100年記念寄付金募金委員の方々からも、体育施設建設資金を指定寄付で集めることは本塾の寄付をも同時に推進するに役立つとの見解も強く、昭和30年11月故平沼亮三先生が文化勲章を受けられ、その第3回目の年金50万円を昭和32年体育施設建設資金として指定寄付され、これが動機となって体育施設建設資金の指定寄付を正式に認めることになった。昭和32年12月三田体育会役員会を開き、体育施設建設資金募集趣意書案を作り、昭和33年1月正式に募金に乗り出した。」
募金目標額は6000万円で計画し、体育会各部にそれぞれ御願額が示され当部も54万円の寄付要請があった。(その後目標額8000万円となる)
1958年12月日吉記念館が完成された。

1959年春より新設された記念館にてバスケケットボール部、器械体操部、バドミントン部の3部が常時練習出来るようになった。

当バドミントン部も部発足以来練習場確保には頭が痛く幼稚舎体育館、ライオンヤージュム、神奈川体育館等連日転々として練習していた。

1959年春より日吉記念館にて練習出来るようになったのは小生が4年になってからであり、大変幸せ者の1人である。小生4年の同期のメンバーは、佐藤(主将)、佐竹(副将)、丹羽(故人)、三上、都築、三浦、野島、(以上男子)、土田(岡本)、大沢(成瀬)、平岡(以上女子)の男女10名であった。

当初の記念館の練習場位置は記念館正門より向って左側体操部中央バドミントン部右側バスケケットボール部であり窓に向って3面のコートであった。窓からは西日が入り通路からは風が入り、あまり良いコート状況ではなかった。この状況を照井先生(体育会主事)兵藤先生に説明変更を依頼し続け1960年インカレにて8シーズン振りで優勝したこともあり、1961年中村主将(故人)のときに念願が叶い現在の中央の位置に4面のコートに変更された。1959年春より日吉記念館にて常



第7回早慶バドミントン定期戦
優勝記念写真
1959.9.13於日吉記念館

時練習可能となり、その年の9月13日第7回早慶バドミントン定期戦が日吉記念館にて初めて開催され11対4にて優勝した。(写真参照)
以後原則的に早慶バドミントン定期戦は日吉記念館(慶応)早稲田記念会堂(早稲田)と交互に開催されるようになった。

上述のごとく日吉記念館にて練習可能となり小生4年のときには中村君、山田君、蒔田君(2年)宮永君、行形君(1年)の優秀な選手が入学しており、小生卒業後1960年高井主将、松田副将、小杉主務の秀れた指導にて上述の選手の努力にて8シーズン振りにインカレ団体優勝し、又全日本総合選手権大会(第13回)ダブルスにても中村・山田組が優勝し、日吉記念館での常時練習の成果が1年半にて実績として出せたことは日吉記念館落成に際して体育回各部、関係諸先輩の熱い御厚情に対して多少なりとも御恩返し出来たと思っております。

大きな大会での優勝は永い事遠ざかっていますが、太平洋戦争にて義塾が各大学中最も戦災の大きかった中で、義塾創立100年記念を機になんとか体育施設建設をとの体育回各部、先輩、関係諸先輩の並々なぬ熱意と御厚情を現役諸君が再度認識し、今後各自が最大の努力をし、諸先輩の思いを胸に、日吉記念館にて目標のある汗を流し練習に励む事が切に望まれる。

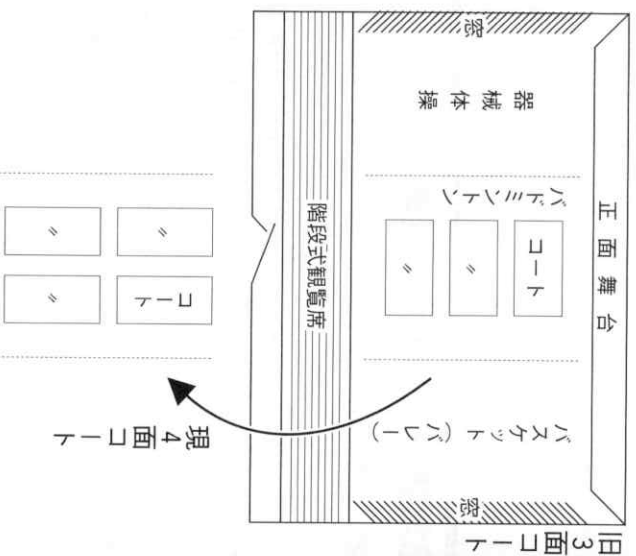
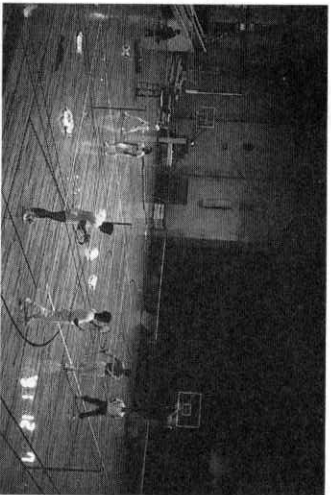
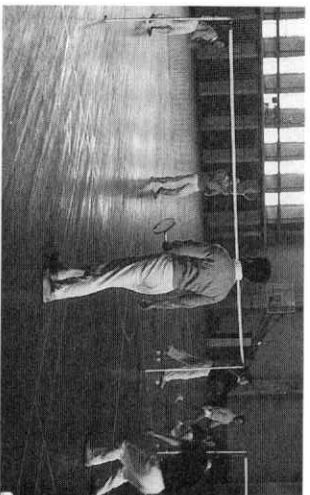
記念館コート4面に変更

小杉 良雄 (昭和36年卒)

前述の如く、1959年(昭和34年)春から記念館中央部でバドミントンコート3面の使用が可能となり、今まで天現寺幼稚舎体育館等間借りして行っていた夜間練習より、日吉で自分達のコートで放課後(午後)十分練習が出来る様になった。これは当時OB・現役は勿論関係者全員の大きな喜びであった。これによりレギュラーは十二分に、レギュラー以外の部員もかなりコートに入れる回数が増し、又コートのまわりでの乱打が自由に行えるようになった(添付図参照)。しかし

この3面のコート（そのコート位置は主としてバドミントン部よりの要請と体育会本部との調整結果であったと聞く。）を使い始めてから種々問題が生じた。

即ち (1) プレー中に左右の窓からの光（特に西日）がまともに目に入りシヤトルを見失うことがある。(2) バスケケット部との同時練習時（特に夏期）正面又は右面の窓を一部開ける故かシヤトルが風に舞う。(3) ネットをピーンと張ると次第にポールが内側に寄り合いネットがたわんでくる等である。そのための対応策もいろいろ考えられ、例えば窓にカーテンをつけてもらい暗くなる分は電球をつけて練習をする等であったが、結局カーテン代、電気代が思ったより高くつくことで実現し得なかった。最終的には横向きコート3面より縦コート2面+2面の計4面に変えてもらうのが一番良いとのこととなり、その変更を学校側（体育会本部経由）へ申請し、その実現へ運動しつづけることにした。しかし当時予算がなかなかつかず早期の実現は困難な見通しであった。岡野マネジヤマー（1961年度）他の話によるとその直後1960年にインカレに優勝したことが一種の起爆剤（ご褒美）となって4面への変更が認められ、1961年度春休みを利用して工事が行われ同年春より待望の4面コートになった由（添付図参照）。又同時にポールの差込み土台はコンクリートで補強しポールをしっかりと固定出来る様にしてもらった。この様ないきさつで現在のコートがありプレーも



やり易くなり且つ観客席からのプレーのやりとりも見易くなったといえよう。変更への過程では(1)故照井体育会主事をはじめ体育会本部の人達にもコートに来て様子を見てもらい、シャトルを実際に打ち問題点を現状認識・理解してもらったり、(2)当時の部長白石先生や兵藤先生にも事情をお話し学校側への働きかけに協力していただいたりした。勿論現4面コートでも問題が全然ない訳ではない様である。

(1)床板の張り方向はコート方面に対し前後でなく左右になってしまったためスベリ具合がやや悪いとのこともあったがそれほど問題では無い。(2)正面入口からの光がプレーしにくくする面が多少あったので大形衝立を作ってもらい防いだ。(3)バレーコート(雨天時等体育館で練習)とバドミントンコートの線が一部分重り合うところがある(プレーが錯綜する)ので練習時間等上手に調整を行っていると思われる。いずれにせよ以後今日に至るまでこの4面コートが塾体育会バドミントン部部員の練習道場となってきたわけである。一思い出深き日吉4面コートよ有難う。

インカレ優勝

高井 貞夫 (昭和36年卒)

天現寺幼稚舎では、羽根の抜けたシャトルコックを壁に向かって打つだけの単調な練習が殆んどであり、後は屋外のグラウンドや付近を走り廻ったり、素振りしかやることなく、始めてバドミントンに接した者にとって、コートにたまにしか入れぬ週4回の練習は面白い筈がなく、1人減り、2人減り、当初25名程度いた同期の連中は、4年るとき9名しか残らなかつた。

人数は少なくなっても、バドミントンの魅力にとりつかれた仲間9人は、夫々の立場で立派にその仕事をしてくれた。苦労人のキンちゃん(松田)がレギュラーをまとめ、しつこいくらい几帳面なキートン(小杉)が部運営を全て取り仕切り、ホイクタ(重富)とカントク(原野)は一般部員の後輩の面倒を見、フイチ(山中)とエビ(瀬戸)の塾高コンピが学連や対外的な仕事に専念し、女子の中村・隅田は自らの練習と下級生の指導を行い、3年一般部員の協力もあって、部全体では実に良い雰囲気であった。

日吉に体育館が建設され、コート3面使用できるようになってからは、練習量も豊富になり、3年レギュラーの中村・山田・蒔田・臼井

達は年を追う毎にたくましさを加え、特に中村・山田のダブルスコンビは、他校からも恐れられる存在に成長し、第14回全日本選手権では、7年振りに優勝し、他のレギュラーに刺激を与え、練習にも次第に熱が入って来た。2年宮永・行形・石神・1年鈴木・田中も打倒立教・法政・明治を目標に立てたメニエーをはくいしばって耐え、他校にひけを取らぬチームワークの良い軍団になった。

しかし、春のリーグ戦4位、秋のリーグ戦3位と総当たりでは、ねぼり抜く法政、小宮を中心に完成された力で王道を行く立教、そして明治には、突き進めぬ壁が立ち塞がっていた。

団体戦でも少人数で勝ち進めるインカレは、最後の望みを持てる試合であり、大阪では、レギュラーだけでなく一般部員も何か盛り上がる意気があり、全員が今までにない緊張感に包まれ、運をも味方に引き込んだ感があった。

準決勝では、ダブルスコ1-1の後、おなじスタイルのバドミントンをし、高校時代から好敵手でありながら、勝てなかった中村が、小宮を破った試合は今でも感動を覚えるものであった。無敵小宮に立ち向かった中村は、それまでのうっぶんを全てこの試合に出したかの様に、鋭いスマッシュを拾いまくり、受身の経験の少ない小宮に果敢に攻撃を加え貴重な1勝をものにした。山田も意気上がり、板垣(弟)を破り、夢にまで見た決勝に進出することが出来た。

法政との決勝では、ダブルスコ1-1の後、宮永が星野とのフルセットの激戦をものにし、中村が小田を、山田が富田を夫々フルセットの未勝利をものにし、実に8年ぶり、3度目の全国制覇、頂点を極めることが出来た。

涙を流させてくれたあの時の感激は、全部員の心に今でも残り、素晴らしい思い出になったことと思う。3年以下のレギュラーが文句も云わずに自発的に苦しい練習を積んでくれたこと、明るくレギュラーを支え上げてくれ、実に素晴らしい雰囲気を作ってくれた一般部員の熱意に、更には練習、合宿に足を運んでくれた先輩諸兄、暖かく見守ってくれた白石部長、岡監督の皆さん、そして今は亡き勝利への貢献者中村に言葉に云い尽くせぬ感謝を致します。

トマス杯大会の思い出

宮永 武司 (昭和38年卒)

1964年と云うと丁度東京オリンピックだった訳ですが、その年の5月にトマス杯大会が東京で開催される事になり、日本バドミントン協会は初めての世界大会でもあり準備に大変だったと思います。当時の協会理事長は先輩の故森友氏で、日本で開催する以上は日本が出場できなければ意味がない(当時はインターゾーンはチャンピオン国開催が原則でチャレンジ制となっており、チャンピオンのインドネシアが既に2回連続防衛開催をしていたため、IBFの規則で他の国で云う事もあり日本になったもの。但し、現在と違って開催国出場権利はなかった。)と云うことでどのゾーンに出ればインターゾーン(本大会)出場可能か考え悩んだ結果、アメリカカンゾーンにエントリーが決まった様です。開催準備も大変だったでしょうが、何と云っても勝ち抜く十字架を背負った選手団はもっと深刻でした。川端監督、佐藤コーチ、永井主将、小宮、板垣(以上いずれも立大出)、堺(早大出)と私が選ばれて、合宿に次ぐ合宿が繰り返されました。今振り返ってみるとその時の猛練習がその後の私にとって本当に役に立ったと思います。ゾーン予選の組合せも決り、その年の2月上旬に出発、最初がメキシコ、勝てば次がカナダ、そして決勝はたぶんアメリカです。約1ヵ月半の長期遠征で、寒い冬の日本から暑いメキシコ、そして又荷物だけでも大変だった気がします。モノレベルも首都高速もなかったので、本郷の旅館から車で羽田まで1時間半以上かかりました。1ドルは360円、外貨制限があったりと隔世の感があります。盛大な見送り(今とは較べものにならない人数)を受けて羽田を飛立って、ハワイ、ロス経由して丸1日かかってやっと着いたメキシコでした。相手の力量は全く未知数でしたが負ける気はしませんでした。ただ、高地のためシヤトルが66ゲレン程度ともなしくらいには閉口しました。試合は8対1と楽勝、私もシングルで2勝出来て満足でした。そして、次の相手カナダと対戦するためバンクーバーへ行き、これも8対1と快勝でした。ただ、今度は中身は大接戦が多く私自身も2勝出来たものの、相手のエースマクドナルドとはフラインナルでやっとなりました。いよいよアメリカとの決戦です。場所はバンクーバー島のザイクトリア、素晴らしい景色の避暑地です。当時は日本人が珍しいぐらいでした。試合は予想通りアメリカのエース、ジム・ブールが強く完敗してしま

い、(私と小宮さんともに)、苦戦でしたが永井・堺のペアがオウルストン・ロジャースとの激戦をものにして勢いがつき結局は7対2で勝つ事が出来ました。その晩、宿舎のロイヤルヨークホテルでの我々だけの祝勝会は今思い出しても楽しいものでした。そして、東京での待ちに待った本大会、東京体育館の特設コート、対戦相手はタイでした。チャロン、チャロンには残念ながら歯が立ちませんでした。私も対チャロン戦13対3とリードしながら追いつかれてしまい、会場からの声援に答えられなかったのを申し訳なく思いますが、今にしてみると精一杯だったのでしょうか。結局、タイには善戦したものの3対6で敗れてしまいました。この大会はチャレンジラウンドで史上まれに見るインドネシア対デンマークの激戦があり、インドネシアからの大応援団が騒ぎ、3面記事を賑わしたのもなつかしい思い出です。この大会の後、次のトマス杯大会(ジャカルタ)、全英選手権にも5回、そしてアジア大会にも日本代表に選ばれて団体で銅メダルを獲得出来たりと思いは尽きません。特に初めて参加した全英ではベスト8入りが出来、次の年の全英では堺さんと2人でデログラムの表紙に登場したりと本当に幸せな選手生活でした。これも、大学入学当時からお世話になった先輩諸兄のご指導のお蔭とこの機会をお借りしてお礼を申し上げます。

創部20周年記念式典

久米 融 (昭和38年卒)

まず、創部50周年を迎え本当に喜ばしい事と心からお祝いしたい。思えば、30年前、吹野委員長のもと、岡本、金坂、貴志、小西、吉田、尾関、安川の諸先輩と現役の新井、北田、西村、根本、久米が委員として、創部20周年事業に取り組んだことが懐かしく思い出される。記念事業は、記念式典と部誌創刊号の発行を行うことであった。記念式典、記念試合及び祝賀会は1962年9月9日吉日にて開催された。

当日の主な御来賓は、広田兼敏氏(日本バドミントン協会副理事長)、津田信一氏(早稲田大学バドミントン部部长代理)、塾関係では寺尾初代部長、奥井前部長、石川体育会理事、照井体育会理事、川上前副部長の8人であったと記憶している。式典は40番教室で行われた。白石部長の開会挨拶に始まり、御来賓の石川体育会理事、奥井前部長、

広田兼敏氏、津田信一氏より御祝辞を頂戴し、最後に部の発展に寄与された方々の労に酬いる為の表彰式を行った。

記念試合は、記念館においてOB戦、現役戦とも早稲田、立教、明治、法政、中央のOB、現役の招待選手と塾との熱戦が展開された。

午後からは、祝賀会が日吉日幸食堂でそれまでの緊張を解し和気藹々のうちにあつというまの2時間が過ぎ無事終了し、委員の1人として大役を果たせたという満足感を味わったものである。

以上が記念式典のあらましであるが、ここ迄もつてくるのが大変な事で諸先輩方の熱意とご努力に感激したものである。

記念事業を開催するにあたって最初の難問は、創部らしい初めての企画であり、又、他に前例のないことで、その規模、形式をどう決めるかであった。結局、調達可能な資金に応じた事業にするという方針のもとに、毎月1回、多い時で2回委員会を開き招待者名簿の作成とその絞り込み、記念品の選定、式次第及び招待者の席配置など真剣な議論が取り交わされたものである。

又、事業資金の募金では、現役の皆さんが手分けをし大変な苦勞をされたものである。当時は振込制度もなく諸先輩を訪問し、目標の90%強を達成した。記念事業の収支決算は4万円の黒字で部誌創刊に役立った。

このような活動を通じて、多くの諸先輩と身近に接し、苦勞を共にし、喜びをわかちあったのも学生時代の良き思い出である。又、30年を経た今日でも諸先輩方と親しくして頂いていることを嬉しく思っている。

1991年6月13日に開かれた三田パドミントクラブ総会において、50周年記念事業の推進経過をお聞きし、30年という時代の変化と昔と変わらぬものを感じ心あたたまる思いがした。50周年記念事業を30年前の記念事業と比較すると色々な面で隔世の感がある。

即ち、OB・OG数300人は当時の3倍。事業予算700万円は当時の20倍。全日空ホテルでのレセプションなど動員力、財政面での成長を感じた。

又、昔と変わらぬものとは、今回の記念事業に対し委員の方々を含め、多くの会員の方々が卒業後数年、数十年経っているにも拘らず、部に対する深い愛情と熱意をお持ちになっていることである。そこに青春の息吹きを感じた。最後に、パドミント部の益々の発展とOB・OGの皆さんの健康を祈って、詩人サムエル・ウルマンの「青春」という名の詩の1部を引用して結びたい。

青春

サムエル・ウルマン

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたをいう。薔薇の面差し紅の唇、しなやかな肢体ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱、怯懦を退ける勇氣、安易を振りすてる冒険心を意味する。ときには、20才の青年よりも60才の人に青春がある。年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うとき初めて老いがくる……………

学連について

福田 辰治 (昭和39年卒)

1961年に学連の担当になった。

バドミントンは大学から始めたので到底レギュラーにはなれないので諦め、大学3年から早々と縁の下役に徹することにした。

当時の学連はお茶の水の岸記念体育館にあり、(現在の日立製作所の本社がある場所) 毎日練習には行かずに学連につめ、連盟に加入している関東の各大学や、全国の学生連盟との連絡に当たっていた。学連に通うための電車賃は、私が住んでいる東横線の学芸大学から渋谷までが10円、渋谷からお茶の水までが20円であった。大学生のアルバイトが1日で500円程度であったから、現在の物価に比例すればこの程度だったと思う。

岸記念体育館にはバドミントンだけでなくあらゆるスポーツの団体が社会人も学生も一緒に入っており、バドミントンは日本バドミントン協会、東京都バドミントン協会の社会人と、全日本学生バドミントン連盟、関東学生バドミントン連盟が仲良く一部屋に入っていた。

学生の場合は委員長、副委員長以外は、全日本・関東の両連盟の仕事をしており、リーグ戦やインカレの手伝いをしていた。

この会館の建物は木造で、しかもかなり古いため、歩くとギンギン音がした。しかし、ここには立派な食堂 (有名なレストランがテナントで入っていたと思う) があり、海老フライやクリームコロッケが大

変美味しかった。特にコロッケと云えば戦後歌に歌われたように、じゃがいもが主で挽き肉が少々入ったものしか食べたことがなかったもので、初めてクリームコロッケを食べた時にはびっくりした。じゃがいものかわりに柔らかいクリームの中に蟹肉が入っており当時としては大変贅沢な食物であった。ライス付で100円位したものと思う。

学連の主な仕事としては、インカレやリーグ戦の企画・運営があった。経費を捻出するために、大会毎にプロگرامの広告を頂きに先輩の間をかけずり回ったりした。男子1部リーグ戦は、神田一橋の国民体育館を使用していたが、これも古い体育館で今は無くなっている。毎日熱戦が終ると、各人が手分けして、当日の結果を新聞社の運動部へ電話するのが日課であった。私は、ライオン(株)の広報部でおなじみ相手は苦戦をしている訳だが、やはりアマスチュアのスポーツは理解されやすいのか、必ず翌日の新聞に結果が報道されていた。

楽しかったのは、リーグ戦が終了すると、毎回ささやかな打ち上げがあったことで、神保町界隈の飲屋へ、先輩に連れられてぞろぞろと入っていくと、店の入口の大きな鍋に、豚だか牛だか得体の知れない臓物がぐつぐつ煮立っており、それをお皿に盛ってもらい、臭み消しにねぎと唐辛子をたっぷり振り掛けて食べながら、コッゾ酒を飲んだ。学連は全員が学生服を着ていたわけだから、大人の人から大目に見てもらっていたのであろう。

学連での苦労話もいくつかあるが、インカレや関東学生選手権の組み合わせをするのが大変であった。大会毎に、上野にある旅館に泊り込みで組み合わせを作ったが、それぞれが連盟の役員であり大学の代表であるから組み合わせが公平になるように発言すべきなのだが、つい自分の大学のことが頭に入り、特に個人戦の場合は激論を戦わすこともあった。

このように組み合わせで苦労をしても、試合が勝ち抜きのため、ベスト8あたりから過密スケジュールとなり選手は休むひまもなく次々と試合を消化せねばならず、大会では必ず1人はアキレス筋を切るアクシデントが起った。

既に卒業後4半世紀が経過し、学連への参加校も大幅に増加、バドミントンのラケットやシャトルコックも改良され、試合のルールも変わってしまった。

現役時代に何とかキープしてきた男子1部リーグも、卒業してから間もなく2部に下がってしまった。栄光を再び獲得するよう、現役諸君には一層の奮起をお願いしたい。

慶早戦敗戦の記

香西 維忠 (昭和40年卒)

自軍ベンチに戻り、数本のラケットを「ガシヤツ」と床に投げ出し、小さな声で周囲のOBに「すみません」と一言。これが1964年夏の慶早戦初敗戦直後の瞬間であった。そのまま洗面所に直行。大変なことになってしまったとの困惑と訳の分からない憤りと悔しさが同時に去来し、洗顔の際は、汗よりも間違いなく涙が多かった。

4半世紀も過ぎた今となっては、記憶の濃淡に従って、断片的に書かざるを得ない。

私のシンゲルスはラストから2番目。本人は勝つつもりではあったが、周囲はポイントを取れる可能性のやや高いゲーム程度と見做していた様に思う。従って、最初から悲壮感溢れるゲームでは無論なかった。私のゲームがもつれ第3セットになった時、同時進行の他の試合がほぼ終了し、結果的に7勝7敗となってしまった。この辺から、俄然注目を浴びる1戦となった。コートチェンジまでは当方の一方的リードで、後半はサーブをスワッシュして終りという単調な試合展開。サーブスチエンジを繰り返すうちに徐々に追いつめられて行った。当時のシャトルは潰れ易く、異常なスピードになるのを承知で、試合の駆け引きとして交換を運らせたりしつつ、つい打ち急ぎミスを重ねたように思う。結果的に勝負どころを乗り切れず、重要な試合を落とす事となり、これを契機に以後「勝負強さに対する課題」と常に対峙する事となる。

当日の交歓会では平静さを装う塾の面々に対し、喜々とした早稲田側の顔だけが印象に残った。その夜は先輩に連れられ、渋谷の裏町に在る、古い焼鳥屋でコッゾ酒をかなり呷ったが、なぜか、酔いがまわって来なかったのを今も思い出す。

当時の学生スポーツ有力校は鉄拳的指導と連帯責任による坊主頭が主流であった中で、整体育会の大勢はリベラル指向であった。にもかかわらず、4年生にそれも秋口になっての全員坊主は悲惨な光景となり、その後、インカレ終了までの練習はピンと張りつめた緊張感漂う毎日となった。振り返って見れば、私自身、大学4年間で最も気合を入れ、練習に取り組んだ期間となった。試合形式の練習時、微妙な判定をめぐり、審判を務める下級生がよく大声で怒鳴りつけられたものであった。

結果的に、その年のインカレは戦前の予想に反し、善戦の末、準備勝となった。一時は念願の監督胴上げが実現かと、当時の吉田監督の側に座りゲーム展開を見守ったものである。

前述の通り「勝負強さを課題」に現在も追求中ではあるが、その中間的考察を蛇足ながら述べる事としよう。

重要な局面に際し、「気魄」と「余裕」が先ず必要。一見矛盾するようであるが、両方同時に必須。次いで、「攻めは丁寧に、守りは粘り強く」であらう。

基本に則した基礎的修練はこの際、論外であるから、競技としてのバドミントンにも充分に当てはまるが、例として面白くないので、敢えて題材にゴルフを選ぶ。結論として、ゴルフで強くなるためには、ある水準に達した後は、大金を賭けてプレーする事。その事により前述の事項に磨きがかかる。その証拠に日本の昔のプロの覇者は全て賭けゴルフでも一流であった。世界的にはトレビノが有名な1人である。特に短いパットは勝負を分ける要素が大で、入れてやるという気魄と、身体を硬直させない余裕が同時に要求される。ミスショット後のリカバーは欲張らず、丁寧に粘って崩れを最小限とする。ナイスマッシュトがたまに出た時は、ホールアウト迄、気を抜く事なく丁寧に攻め切らねばならない。勝負どころでの対処の仕方として、広範に適用可能と思われるので、御参考迄。